

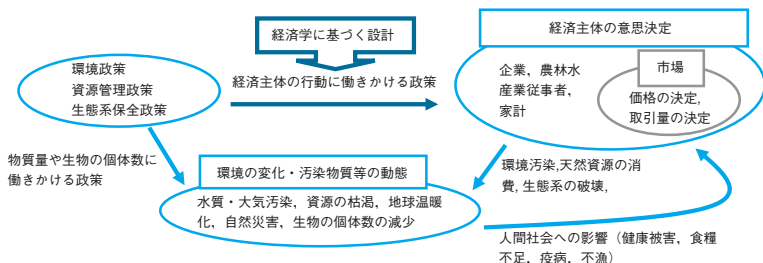


友人たちと(右端が筆者)

生態経済学の研究プロジェクトにも参加することができた。私は博士論文で、外来生物や病原菌の拡散制御を経済学的なアプローチから研究したが、このなかで、他分野の研究者と連携をしながら研究を進めることを学んだ。この時期の経験は、現在の私の研究スタイルに大きく影響している。

二〇一〇年十月に名古屋で開かれた第一〇回生物多様性条約締約国会議(COP10)をきっかけに、生物多様性という言葉が社会に浸透しはじめている。また、温暖化に伴う南方の外来生物や新たな病原菌の日本への侵入

図表 環境資源問題における経済学的作用



### 大学の国際化と留学経験者の役割

や野生生物問題も懸念されている。さらに、企業のCSR活動を通じて環境保全への取り組みも活発になってきている。それ故、生態経済学を実践的に用いた研究により、社会に貢献することができると、感謝している。

ミネソタでは研究だけではなく、教育の仕方も学んだ。米国では大学院生が講義をする前に、プロフェッショナルな講義技術を身に付けるためのトレーニングを半年から一年間受けることが義務付けられている。そこでは、講義の仕方について事細かくすべてを学ぶ。講義時の声量や呼吸法や話す速

度、目の位置、姿勢や立ち位置、人種や国籍の異なる学生への配慮の仕方などのすべてである。米国では一クラスごとに高額な授業料を払うため、ひどい講義に対しては学部生が授業料の払い戻しを求める可能性がある。この危険を回避するために、徹底した講義技術のトレーニングがなされる。私も、当時は何度も自分の講義の姿を写したDVDを見ながら、さまざまな修正をした。ミネソタで学んだこの教育技術を活かし、日本における大学教育と大学教育産業の活性化に貢献したいと考えている。

二〇一三年四月一日に、私は長崎大学環境科学部へ赴任した。本学部は、社会科学、人文科学、自然科学、工学といった複数分野からの研究者が集まり、さまざまな環境資源問題に分野横断的にアタックしている。また、本学部は、分野横断的な領域で学部生教育に力を入れている。これは、ミネソタ大学で目にした先進的な学部の姿でもある。研究者として、また教育者として力を尽くしていけることをありがたく感じている。

財団からのご支援があり、ここまでたどり着くことができたこと心から感謝している。ここからさらに研究と教育に尽力し、日本社会に貢献をしていきたいと考えている。

# 留学が可能にしてくれた 生態経済学との出会い

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科准教授

堀江哲也

ほりえ てつや

経団連国際教育交流財団奨学生(二〇〇四年度)・二〇〇一年神戸大学経済学部卒業、二〇〇三年同大学院経済学研究科修士課程修了、二〇〇一年米・ミネソタ大学大学院修了(Dr.D. in Agricultural and Applied Economics)。二〇一〇―二〇一二年上智大学環境と貿易研究センター特別研究員、二〇一二年上智大学大学院地球環境学研究科助教を経て、二〇一三年より現職。専門は環境資源経済学、生態経済学、農業経済学。



## 米国で面白いと思われている 経済学は何だろう?

そのような気持ちを抱きつつ、私は二〇〇四年の夏にミネソタ大学大学院応用経済学部へと留学した。留学前は、農業経済学を専門分野としていたが、留学を契機に自分の専門をすっかり変えてみようと考えていたのである。留学した直後は、さまざまな教授が活発に研究活動をしている華やかな姿を見て、目移りをしたものだった。結局、私は、環境資源経済学を専門として学ぶことにした。環境資源問題の背景には、企業、農林水産業従事者、家計といった経済主体の市場における行

動がある。環境資源経済学では、これらの経済主体の行動原理を解明し、そのうえで経済主体の行動に影響を与えて問題を解決する政策・制度の設計を行う。二十一世紀の人類が直面する最大の問題である環境資源問題に対し、経済学を用いて緻密に政策・制度設計を行い、解決をすることに、私は大きなやりがいを感じた。

## 留学三年目に訪れた転機

ミネソタ大学における最大の収穫は、生態経済学との出会いであった。生態経済学は、環境資源経済学から派生した新分野である。生態経済学では、生態学、保全生態学、森林

●経団連国際教育交流財団は、経団連第一代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。海外の大学・大学院に留学する日本人学生や日本の大学に在籍する外国人留学生に対する奨学金の支給を通じて、わが国の学術研究や世界経済の発展に寄与するとともに、国際社会に貢献する人材を育成することを目的に活動している。

学などで扱われる生物の動態に関する情報や生態系の情報を用いながら、生態系管理を効率的に行うための制度設計を経済学的な観点から行う。

当然のことではあるが、経済学者は、上記の自然科学系の学問分野の情報を持っていない。それ故、生態経済学を研究するためにはこれらの他分野の研究者と連携しながら研究をしなければならぬ。経済学のみを勉強している大学院生が一人で研究を行うにはハードルの高い分野なのである。幸運なことに、私の所属した応用経済学部があったセントポール・キャンパスには、森林資源学部(Department of Forest Resources)、生態・進化・行動学部(Department of Ecology, Evolution, and Behavior)、米国農務省の研究所(USDA Forest Service)があり、研究者間の研究と教育についての交流が非常に活発であった。それ故、私もその恩恵にあずかることができ、自然科学系の他学部の講義を受け、